



普及に課題山積も「魅力的」施工事例 福岡の CLT

技術と情報の普及へ 健康住宅の事例

福岡において、CLTの認知度は決して高いとはいえない。県内で最初の施工例となった(株)大匠建設(福岡県那珂川市)の社屋の完成は2017年。それから約3年が経過したが、CLT工法による施工例はわずか数例にとどまる。大きな理由はコスト高であることは前述の通りだが、公的助成制度を活用した施工事例もいくつか出てきた。

福岡市西区では、CLT工法と在来工法で構成された「木質構造技能者育成センター」(以下、育成センター)の建築が進められている。健康住宅(株)(福岡市城南区)がグループ会社とともに、木造だけでなく鉄筋コンクリート造などすべての建築関係者向けにCLTの可能性にチャレンジした物件で、7月にオープン予定。この

育成センターは、林野庁のCLT活用建築物棟実証事業制度が活用された。

健康住宅グループで、設計業務を手がけるLoops Architect(株)の吉本高広社長は、「我々としてもCLT工法を取り組むのは初めてでしたが、非常に多くのものを得ることができました」と話す。CLTの調達、設計業務、基礎工事や建て方など多くの部分が在来工法とは異なっていたという。CLT工法に取り組んだきっかけについては、「これまで、健康住宅グループは木造住宅に関わってきました。近年、環境への配慮などから、学校などの非住宅建築物を中心に、木造建築が見直されています。木造に関わる我々としては、木造建築の最先端であるCLT工法について知っておきたかったのです」(吉本社長)と話す。「育成センター」としたのは、グ

ループ内での情報共有だけでなく、外部を含めた建築関係者にも広くCLTを普及させるためだという。使用した木材はすべて国産材だ。

CLT普及のため 知見は共有していく

吉本社長は、「CLTには多くの課題があります。ただ、CLTは工業製品に近く、規格化に適しています。製品による品質の差ができるにくいなど多くのメリットがあります。CLT工法は図面による検討や施工精度、協力施工会社との連携が非常に重要でした。苦労も多かったですが、貴重な経験ができましたし、普及すべき技術だと思います」と育成センターの建築を経たうえでの感想を話した。

続けて、「CLT工法はとび職人だけのものではなく、一般戸建

住宅を主とした大工にも門戸が開かれた工法だと思います。そういうところも踏まえて、我々が得た経験と情報をより多くの方々に共有していきたいですね。CLTのサプライチェーン強化にも貢献していきたいと考えています」とCLT工法の普及に意気込む。

育成センターは、CLT工法と在来工法とのミックスで建てられた。外周部にCLTパネルを用いた構造躯体、内部を在来軸組工法とした。これにより、コスト低減だけでなく、間取りの自由度向上でもメリットがあるという。

大匠建設・ブルク CLTで2棟目へ

来年2月、第1号物件を手がけた大匠建設と(株)ブルク(福岡市南区)のタッグによって、(株)筑紫工業の新社屋がCLT工法で建築され

ることが決定した。木製建具工事を手がける筑紫工業の新社屋は、福岡県那珂川市に建設予定で、完成すれば大匠建設の社屋に続き市内2棟目となる。

施工を手がける大匠建設の井上真一社長は、「県内最初のCLT施工事例となった当社の社屋は、完成後に多くの見学者を受け入れてきましたが、その数は累計700名となりました。自社の社屋をCLT工法で建築したからこそ、筑紫工業にも社屋の建築を任せていただいたのだと思います」と話す。

たしかに、CLT工法によるメリットは数多い。井上社長がCLTにこだわったのは、環境事業への思いの大きさもあるようだ。井上社長は、経営者で組織される(一社)福岡県中小企業家同友会では環境経営委員長を務めるほか、東日本大震災や九州北部豪雨で

のボランティア活動にも積極的に参加してきた。また、大匠建設の社用車には電気自動車を採用するなど、環境意識の高さは井上社長自身も認めるところだ。

県内1棟目 手がけたきっかけ

「ハウステンボスの宿泊施設・変なホテルがCLT工法で建てられるなどを知ったのが、CLTとの最初の出会いでした。強度や断熱性のほか、リサイクルにも適していることなどに感銘を受けました。そこで、店舗デザインなどで付き合いのあったブルクにCLT工法での新社屋建設を打診し、完成に至ったのです」と井上社長は話してくれた。

ブルクは、賃貸住宅や店舗、ホテルなどのデザイン会社で、自社で所有するアパートなどのデザインも手がけてきた。「自然との相